

学 位 論 文 題 名

The Structure of the Man-Made Environment

－ Image and Meaning －

（人工的環境の構造－イメージと意味－）

学位論文内容の要旨

本論文の目的は、人工的環境が創り出す構造的な特徴を検証することである。それは都市、ランドスケープ、そして建築のデザインを行う上での主題ともいえる。

ここ 15-20 年の中で特に注目すべきは、日本の起源に深く根ざした信仰が存在する一方で模倣や複写といった傾向も促進されたという逆説的な状況である。この状況は、公的・私的な空間を問わずデザインにテーマパーク的な要素が広まっていったことと時期を同じにしているが、この傾向からいかに‘模倣’がイメージの概念の実質的なものになっているかが証明される。それでも今なお、イメージという概念は意識されているようだ。（Kevin Lynch「都市のイメージ」（1960）から都市のデザインにおけるイメージの重要性が強調された）。現代の市民は、TVやビルの広告、雑誌やコマーシャルなどの売ることを目的とした偽のイメージづくりに影響され、ますます視覚的なものを求めるようになってきた。大量生産の時代とも相まって、この種のイメージが強調されることは、都市空間に不可欠な深層的な質の低下と創造行為に対する態度そのものを変える結果となりかねない。これは‘模倣’という行為において特に顕著に現れる。よって本論文では上記の状況をいかに回避するかを検証することを目的としている。その際、過度に機械的に操作されたデザインプロセスの中から真の目的を取り戻すことと、行われたデザインそのものの原初的な意味のみに焦点を当てる必要がある。‘模倣’という概念の中で本当に重要なのは、単なる外面のイメージではなく、そのデザインが持つ‘意味’なのである。

本論は 8 章により構成される。第1章では主題の説明を行っている。第2章では現在の研究対象範囲、用語の指定、及び本研究の構成と方法論を示す。第3章、および第4章は、本論の中核をなす部分であり、本論文の後半の議論での基礎となっている。第3章は「*Design of Harmonious Landscape and Its Preservation. Study of Calvary Ways in Poland*」についてである。「Polish Calvaries」（最も有名な Kalwaria Zebrzydowska にある）は、本質的に宗教の目的で創られた風景の複合物であり、精神的な必要性和ランドスケープ・デザインが融合した成功例である。つまり、‘意味’とはデザインが内包すべき必要性和永続的な存在感、そして‘意味’の保存こそが保存の主題であることを指摘している。第4章は「*Regionalism in Service to Assimilation of New Ideas. Imitations of Distant Patterns and Regionalism in Urban and Landscape Design*」についてである。この章では、グローバルゼーション、リージョナリズム、‘模倣’それぞれの実体について論じており、‘模倣’という行為はバナキュラーな作法であると推測している。‘模倣’を土着的なものではないにしろ、新しいアイデアのための推進力として示している。また、リージョナリズムは新しいアイデア

に対し足かせとなるものではなく、新しいアイデアと地域を融合しうるものであることを論証している。リジョナルなアプローチを通して複写されたオリジナルの元来の質を再構築しうる、と仮定した結論に達することができる。第5章は‘意味’の定義を明確化し、その適用に際し論理的背景を示している。街 (Joseph Rykwert によって指摘される) が象徴的パターンとして認識されていた古代より‘意味’の重要性は確認されており、近代では、Robert Venturi が‘ducks’と‘decorated sheds’の建築の中で‘意味’に対する2つの逆説的表現方法を示している。本章では都市空間における‘theming’の傾向は顕著であり、公的・私的、商業用空間・居住空間におけるテーマパークの計画に従った配置などを挙げている。さらには、現存する‘模倣’の例と過去からの原型の分析から、①日本の首都や渤海王国の消滅した首都は唐王朝の長安のパターンに倣い建設された。②ヨーロッパ、特にポーランドの Calvaries はパレスチナのエルサレムの複製である。③コペンハーゲン Tivoli 公園はアミューズメントの原型としてローマとルネッサンスの Tivoli が再現されたもので、次々に世界中の多くの場所で複製された。本章では最近建設された‘模倣’も考察し、①都市の概念を持つジャカルタの衛星居住地である Kota Wisata。②Bavarian Village に見られる再活性化されたアメリカの街である Leavenworth。③長崎にあるハウステンボスの居住地である Wassenaar などは、単なるリゾート地ではなく、生活全般を理想的な環境の中で過ごす場所であり、そして将来のコミュニティのためのモデルでもあることを指摘している。第6章では、人々が‘模倣’に引き付けられる動機を以下に14に整理している。①商業化②ユニークさのアピール③均一方法の模索④明確なアイデンティティの必要性⑤新しいことの魅力⑥ノスタルジア⑦存在に対する不満⑧価値の探求⑨‘新しく、よりよい現実’への探求⑩無益なことの必要性⑪安全の必要性⑫現代の建築と都市生活に対する恐怖感または極度の疲労⑬政治的な理由⑭都市空間における方針。第5章での試みが「何か?」という質問に対する答えであったのに対して、これらの動機は「なぜ?」という質問への答である。第7章では、前章の中で説明された状況を分析し、デザイン手法としての‘模倣’ (一般的に言うと、外国や離れた土地の導入) では、多くの長所と共に欠点もあることを指摘している。‘模倣’は、機械的過ぎたり、厳密過ぎたり、失敗してしまったり、とりわけ視覚的なものにとどまってしまう状態が頻繁に起こり、それらは時に Lynch のイメージアビリティの考え方に対する否定となる。環境の質においては決定的であるが、アイデンティティや構造だけでなく‘意味’も所有する必要がある、イメージの考え方における歪みは今日の人工的環境の重要な特徴であることを指摘している。

第8章は本論の結論を、以下の事項に要約している。

①必要なことは特定の解決策のための明確な目的である;日本語の言葉「事実」によって表現される真実性との関係性。‘模倣’は明確な事実になり得ると同時になるべきであり、無意味なデザインまたは単に機械的なプロセスであるはずがない。日本の京都やポーランドの Kalwaria Zebrzydowska のような多くの例は、それが可能で、さらに非常に効果的である。

②最終的な結論は、周りの事実は1次元的なものより大きな影響力を持っているということより台頭する。視覚的外観はまさにその最も外側のレイヤーであり、本質はその背後に隠れている。主題(劣悪なイメージに含まれている優れた‘意味’)の構造の認識はデザインプロセスにおいて重要である。従って、‘模倣’の文脈の中で、最も重要なことはイメージの複製ではなくむしろ‘意味’の複製である。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 小 林 英 嗣

副 査 教 授 越 澤 明

副 査 教 授 角 幸 博

副 査 助 教 授 瀬 戸 口 剛

学 位 論 文 題 名

The Structure of the Man-Made Environment – Image and Meaning –

(人工的環境の構造－イメージと意味－)

本論文は、都市、ランドスケープそして建築群のデザインにおける、デザインプログラムとプロセスにおける意味とイメージの有用性を再確認し、模倣や複写という過度に機械的に操作された汎用されつつある今日的な傾向を回避することの必要性を認識し、公共的な空間の計画設計に不可欠となる人工的空間の計画設計における構造性と意味性を指摘し、これからの公共的な空間の計画設計における基礎理論の構築を目指したものである。

公共的・私的な空間を問わず“模倣や複写”の傾向が加速化し、都市空間の計画設計プロセスにおける‘模倣’が実質的・汎用的になり、ケビン・リンチによって強調された(1960)都市のイメージは、視覚的・表層的なものとなり、都市空間における意味性や深層的な質の低下とともに計画設計行為における目標とデザインプログラムの変質が都市空間の低質化をもたらしつつある。

本論文では‘模倣や複写’によって計画設計された今日的な事例を対象として、都市の本来の魅力である都市空間の深層性や意味性の回復を目標と、計画設計の原初的な意味に焦点を当て、都市空間設計の原点を論じたものであり、単なる表層的・外面的イメージではなく、計画設計が持つ‘意味’を論じた研究は、持続的な都市計画設計の観点からも重要な意味を持つている。

本論文は8章により構成される。第1章では研究の主題に加え、既往の概念整理規定を行っている。第2章では現在の研究対象範囲の定義、使用概念の指定、研究のフローと方法論を示している。また対象事例の観察ヒアリング調査と文献調査による個々の計画設計思想と論考が論文のベースとなっている。第3章は、ポーランドを代表するカルヴァリ(Kalwaria Zebrzydowska)の分析と論考である。カルヴァリは宗教的な目的で創られた風景複合物(ランドスケープ)であり、本質的には精神的な意味性と風景デザインが融合した人工的環境であることを分析し、文化的・宗教的な永続性からも人々の生活を支える物理的かつ精神的な人工的環境であり、将来に亘り持続されるべき存在感であることを論考し、風景・環境の‘意味’こそがデザインが本来的に目的とすべき事柄であり、‘意味’の保存こそが人口的環境の保存の主題であることを指摘している。第4章は、‘グローバリ

ゼーション’ ‘リージョナリズム’ ‘模倣’ について論じ、‘模倣’ はバナキュラーな作法であり空間創出（新しいアイデア）の推進力であり、‘リージョナリズム’ は新しいアイデアと地域を融合しうるものであることを論証している。第5章は3つに分かれており、第1節では人工的環境の‘意味’の明確化と論理的背景を示し、都市が象徴的なパターンとして認識されていた古代の‘意味’の重要性と近代における‘意味’の認識に対する比較を行いつつ、都市空間や建築空間を対象とした記号学と同様に建築理論学の成果を理論背景として整理している。第2節では公共的・私的空間におけるテーマパーク型計画設計を、都市空間における主題化の現象分析から、同時代の都市の‘Disneyisation’ と ‘museumisation’ を指摘している。第3節では現存する‘模倣’の例と過去からの原型を分析する：日本そして渤海国の首都計画設計における唐王朝・長安の原型性の影響と意味、欧州とりわけポーランドのカルヴァリエにおけるパレスチナ・エルサレムの原型性と再現の意味、コペンハーゲン・チボリ公園におけるローマ・ルネッサンス期のチボリの原型性と再現について比較分析、及びジャカルタの衛星居住地である Kota Wisata、再活性化されたアメリカの街 Leavenworth、日本・長崎にあるハウステンボスの居住地区 Wassenaar を比較分析・論考し、生活と環境、技術そしてコミュニティにもとづく意味性を指摘している。第6章では、‘模倣’ への動因を整理し、①商業化、②ユニークさのアピール、③同一化の模索、④明確なアイデンティティの必要性、⑤新奇、⑥ノスタルジア、⑦存在に対する不満、⑧価値の探求、⑨‘新しく、よりよい現実’の探求、⑩無益なことの必要性、⑪安全の必要性、⑫現代の建築と都市生活に対する恐怖感または極度の疲労、⑬政治的な理由、を指摘している。第7章は、都市デザイン手法としての‘模倣’（一般的に言うと、外国や離れた土地の導入）の長所と欠点を指摘し、‘模倣’は、機械的移植や視覚的・表層的なコピーは人工的環境の質の低下においては決定的であり、表層的形態・意匠でなく、文化的・生活的な‘意味’の移植・増殖が必要であり、今日の人工的環境の計画設計における都市イメージに対する歪みの是正の重要性を指摘している。第8章は、本研究で得られた知見を総括した結論および今後の課題をまとめている。すなわち都市空間、ランドスケープ、建築群などの人工的環境の計画設計プロセスにおける人間と環境間の構造と意味性は、人工的環境形成における‘模倣’の文脈におけるイメージの複製ではなく‘意味’の複製と増幅によってのみ達成されることを指摘し、次世代における持続的な都市の計画設計論の基本的理念と理論的な枠組みを提案している。

これを要するに、公共的な空間の質を主題とする持続的な都市や地域の計画設計において、環境と空間の意味性の回復と正則的な伝承は、人工的な環境の再生プロセスを通底しうる認識論であり生成論であることを事例を通じて整理・提案したものであり、都市空間計画学、都市デザイン学に貢献するところ大なるものがある。よって著者は、北海道大学博士（工学）の学位を授与される資格があるものと認める。